



『 釘をつくる 』

割鉄(包丁鉄)を使って釘を作っています。これは明治時代の初め文部省から出版された『衣食住之内家職幼絵解之図』に描かれた釘鍛冶の作業場ですが、江戸時代の職人の様子がそのままうかがえます。

筆者は一躍斎国輝(二代目)です。天保元年に生れ、明治7年に没、45歳でした。明治初期の開化風景、また文部省などのすすめにより多くの教育用の錦画を製作しています。絵には右のように説明されています。



鍛冶鉄物は諸国より出るといへとも先京都より廻るを登りといふ東京にて製造するを地といふ是は鉄を夫々の品に製すには依炭といふ極やわかな炭を細かくだきふいごといふ火おこしの具にて火を起こし火の中へ幾度も入ては出しかなどこの上にて三人又は四人にてあひ槌にて段々きたへ何しなによらず造るの図

現在、金物と言えば三条(新潟県)の名をすぐに思い出しますが、三条の金物の発祥は、江戸時代に和釘の製造から始まったとされています。鞆(広島県)は舟釘鍛冶から発展し、姫路でも釘鍛冶が多くありましたが、鎖やナットの製造に転向し、現在わずかですが『ふすま釘』が生産されています。

新潟県の三条は越後平野の中ほどに位置し、信濃川と、そこに流れ込む五十嵐(イカラシ)川の交わる所にありますが、昔は治水が良くなかったため、度々の洪水で農家が疲弊していたといわれます。

江戸時代の中頃に、幕府の直轄地だった三条に、江戸から派遣された代官の大谷清兵衛が農家の次男三男の労働力を吸収し、職を与えるために、和釘の製造を奨励したといわれています。和釘は鍛冶の仕事としては一番簡単だとされており(高級なものは技術的に難しい物もあるが)、その後、三条を中心にして近在で大量の和釘が作られたといわれますが、それを販売する業者が現れ、これが問屋のさきがけとなります。当時は、和釘を売るのに専売力があったようで、近在の業者(例えば燕の業者)から我々にも和釘を売らせて欲しいと江戸の役所に調停を願い出た古文書が残っています。(但し却下されています)

ちなみに、三条では今も釘鍛冶さんが残っており、神社や神輿、太鼓などに使われる釘を昔ながらの方法で生産されています。

三条の記事は外栄金物(株) 外山 登 氏(三条市在住)によります。

参考資料

『衣食住之内家職幼絵解之図』 文部省 1873年

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
<http://www.kanamonoya.co.jp/ryou@memenet.or.jp>

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください!!